

<小中学校 AL 丸わかり解説ブログ>

アクティブ・ラーニング

考え合う<響室>づくり

—授業の構想・起案から実践・評価まで—

梶浦 真 著

教育報道出版社

はしがき

このブログを書き始めた目的は小中学校の校内研修を通して考えたことや、中央教育審議会の示す次期指導要領の概要を知らせるためだ。学校や研究会の講演では、アクティブ・ラーニングについて十分に語る時間が確保できない場合もある。また、私の説明内容が稚拙であり伝えるべきことが伝わらなかつたりすることも多い。その、舌足らぬ部分を補い、授業のAL化に関する情報をまとめたブログがこの本の元になっている。ブログへの以外とアクセス数が多かったことから、一冊の本にまとめることにした。

授業のAL化については実践的な疑問が多い。そもそも、これまでの授業とはどこが違うのか、具体的にはどんな指導方法があるのか、評価はどうするのか、ALと言える授業と言えない授業はどこで判別するのか等々。コンピテンシー・ベースへの移行や、カリキュラム・マネジメントとALを一体として実践したりする教育活動など、横文字の増えた教育改革にはわかりにくい部分も多い。

そこで、次期指導要領の背後にある考え方や、授業の構想や評価の在り方などを一篇読み切り形式で解説的にブログへ掲載した。次期指導要領や近年の教育学や学習科学の考え方を自分自身に理解させることも、このブログを書くねらいであった。「根拠を明確にした上で、自分の考えを述べる」という意味では、このブログ上にアウトプットする作業自体が私にとってAL(能動的学習)の一つだったと言える。

ブログは基本的に一篇ずつの内容になっており、どこから開いても一遍読み切りで読める点が本書の特徴だ。ブログ読者から「読み直したい場所を、その度に探すのは面倒だ」という指摘を頂き、内容を修正しつつ直近の内容を収録した。中央教育審議会の議論が進むに連れ、中央の情報も刻々と変化をしている。つまり、今日の情報が明日には陳腐化してしまうのだ。このブログを追うとそうした変化や学校でリアルさを増している「課題」も見えてくるであろう。

堅苦しい解説書ではないので、授業のAL化を検討する上での基礎資料として気軽に読んでいただければ幸いである。過度具体的過ぎず、どの様な教科の教師でも汎用的に読める内容になっていることも特徴だ。但し、図類は大きさの関係から、この本に収録するにはやや小さ過ぎた。気になる図は是非ブログ(モニターを通した大きさ)で確認して頂きたい。

❖ 目 次 ❖

1.アクティブ・ラーニング『実践本格化元年の確認事項』－8

①加速する教育界の変化と日本の指導要領 ②世界の教育動向 ③教育の世界的な地殻変動が始まっている ④軸足固めから始めるアクティブ・ラーニングとカリマネ ⑤個人技としての授業から組織的な技としての授業力向上へ

2.アクティブ・ラーニングは学校によって形式が異なる－11

①子供や学校の実態が変わるとALも変わる ②カリキュラム・マネジメントの質・成果がALの価値と方向を決める

3.アクティブ・ラーニングの「メリット」と「メソッド」－「わかる」と「はかる」－12

4.アクティブ・ラーニングの深さは「多様・多段階・多要素」だ－13

・ALはマルチ・マトリックス構造を持つ

5.アクティブ・ラーニングのねらいは「方法の導入」ではない－14

①ALは昔からやってきたことなのか ②「過去にあった」と「今日の授業にあったかどうか」は別だ ③大事な視点は「これまでと同じ授業で結果・成果が変わるか」 ④結果にコミットする教育、アウトカムの重視が子どもの未来を支える

6. 過疎地域の学校とアクティブ・ラーニング－16

7.教師のアクティブ・ラーニングと徒弟的組織

8.子供の「知的活動」の活性化がアクティブ・ラーニングの鍵を握る－17

①アクティブ・ラーニングは「知的活動の活性化」が要 ②「学習的な活動」を目指す ③ALは「親心」の学びだ

9.アクティブ・ラーニングの要は「ジレンマ・マネジメント」－18

①教師の仕事は「省察の実践」という特徴を持つ ②状況を省察して、臨機応変に対処する ③インプットとアウトプット、受動と能動も子供に応じてマネジメントする

10.アクティブ・ラーニング時代の教育評価(基礎知識①～⑪)－20～46

◆評価方法の確立は<永遠の宿題> ◆AL時代・実社会に求められる『能力と育ちを評価』する ◆カリキュラムの人間化と矮小化 ◆汎用的・総合的な能力を捉える ◆拡がる評価対象の能力と育てるべき「能力」の基礎 ◆評価が偏ればカリキュラムや教育観も歪む ◆授業AL化が目指すことは、『授業の結果育てることができた【結果能力】を変える』こと ◆観察－推察－洞察－考察による学習価値の可視化 ◆見えやすい能力は評価しやすいという「錯覚」 ◆

評価規準（基準）の内容・構造を整備すれば評価は機能するか③つける評価 調べる評価 認め・育てる評価 ◆信頼に耐える評価からよい結果が出せる評価へ◆学習評価における客観性と信頼性の価値 ◆評価の客観は絶対的な価値なのか ◆評価の客観は絶対的な価値なのか ◆外からの客観性と自らの客観性 ◆評価の価値と正確性の優先順位 ◆測定の過剰がもたらす歪んだ評価観 ◆信頼度の向上と評価能力の向上、許容範囲のコンセンサス ◆気が付くこと見えること、気が付いても見えないこと ◆評価活動の組織化・協働化③能動的かつ協働的な評価組織の開発 ◆『星の王子様』の指摘 ◆見えにくい能力を可視化する評価活動 ◆見えにくいからこそ、〈見出す評価活動〉が必要 ◆伝統的評価から新たな評価文化—手法の開発 ◆子供の個性を伸ばす評価—学校や教師の個性が生きる評価 ◆評価活動のポリシーとデザイン ◆「暗黙知の顕在化」を可能にする評価眼力の向上 ◆協働知・集会的知識 ◆学習の進化と評価の変化 ◆評価の目的と方法を開発する ◆過去を調べて答えを見つける学びから未来を創る学びへのシフト ◆評価を活かすだけでなく、子供と教師が生きる評価をする ◆状況の中で子供の変容を見取る「変容的評価」 ◆その場しのぎの知識を測る評価から「学びを支える力」の評価へ ◆「評価の方法は「目的」から出る ◆これからの評価は「標準化・画一化」を超え含む「独創性」が大事

21.アクティブ・ラーニングの実践的な意味—46

①アクティブの「アクティブさ」はどこに生まれるのか ②AL はあるのではなく「なる」もの ③能動的を超える「意図的学習」 ④方法主義・手法探しに閉じない実践活動の創造

22.アクティブ・ラーニングのキーワードは「化する」指導にあり—47

①人の脳は「わかりたがり」な性格を持つ ②人の脳は自ら問う行為によって発達する ③「化する」工夫が子どもの思考活動を支える ④学びの文脈化、子ども化とカリキュラム・マネジメント

23.アクティブ・ラーニング時代の学習課題—49

①「何か」を変える学校と、変えない学校 ②問いの質、問い方の過程が変わると、脳の育ちも変わる ③伝統的な学校型の問いは、実社会の問いとは異なる性質を持つ

24.アクティブ・ラーニングを支える四つの問題領域—51

①<過去の延長線上>を超えた問題との対峙 ②リアル問題の解決が汎用的能力を育む ③「問題」の種類を組み合わせて汎用的能力を育てる

25.アクティブ・ラーニング時代の「振り返り活動」—53

①「振り返り活動」への期待と注目 ②「振り返り活動」が持つ教育効果 ③振り返り活動そのもののアクティブ・ラーニング化 ④継続した学びに不可欠な「振り返りの態度」

26.授業のアクティブ・ラーニング化とワーク・シートの関係ー55

①ワーク・シート依存型授業の課題 ②学びの期待感に欠ける授業 ③学びのアクティブ度、クリエイティブ度を上げる「ノート」学習 ④要求された問いへの解答から、考え出す能力を発揮する授業へ

27.教師の働きかけとアクティブ・ラーニングー58

28.アクティブ・ラーニングと「活動理論」ー58

①アクティブ・ラーニングと「協働的な学び」 ②アクティブ・ラーニングと「活動理論」 ③カプセル化した学習からの脱皮 ④「活動理論」の応用化と現場的拡張

29.研修のアクティブ・ラーニング化とその効果ー60

①文脈性のある思考活動が「学び」の質を決める ②教師の個人的な実践を「共吟味」する研究的活動 ③研究実践の過程と文脈の蓄積が見える「紀要」の活用 ④自問自答する個と組織

30.「アクティブ・ラーニング」と協働的な学びー62

①学び手の主体性発揮は教師の願い ②「協働的な学び」の実現と意図 ③人がく学ぶ才能の真髄は協働で学ぶ本能にある ④協働的実践行為が子どもの成長に働きかける

31.アクティブ・ラーニングと「学習的コミュニケーション」ー63

①アクティブ・ラーニングと「話す・聞く」 ②対話型の学習とアクティブ・ラーニング ③学習的コミュニケーションを支える三つの柱 ④コミュニケーション不全の原因に応じた指導

32.アクティブ・ラーニングと「反復学習」ー65

①反復する学びのバリエーション ②反復型学習の特徴と差異 ③子どもの能力の特徴が生きる反復を選ぶ ④戦略的反復学習が学習効果を上げる

33.アクティブ・ラーニングと子どもの「知識構築」「学力形成」ー68

①学力の形成と構造 ②学問の知識構造とタキソノミー(教育目標の構造化) ③子どもの主体的・現実的思考状態を生かす ④「既知の知の獲得」「未知の知の創造」「新知の発見」

34.アクティブ・ラーニングと「主体的な学び」ー70

①結果主義の学習観と過程重視の学習観 ②自分の頭を使って学ぶ ③学びの当事者になる ④能力はその能力を使う行為によって伸びる

35.アクティブ・ラーニングと学校過酷時代の組織づくり(＜残雪＞に学ぶ)ー71

- ①磨き合い、支え合う組織の価値 ②多様化し変化の速度を増す学校教育
③過酷さを乗り越える組織づくり ④「残雪(大造じいさんとガン)」に学ぶ組織論とリーダーシップ

36～38 アクティブ・ラーニングと「小学校プログラミング学習(PGL)」ー73

- ◆常識と予測を超えて進歩が加速する ◆プログラミング学習と教育の変化 ◆知識刷新と必要なツール・能力 ◆AL と PGL の考え方を構築する ◆パパートの構築主義
①常識と予測を超えて進歩が加速する ◆国家の存亡と個人生活に影響する ICT ◆技能教科の枠を超えた PGL のねらい ◆創造的な学びによる知識の構築 ◆知識技能注入形の学びと構成主義の学び ◆子どもは自ら働きかける行為を通して学ぶ ◆他教科と共通の「考え方」「横断的な資質・能力」との関連 ◆学習環境×発揮する(その子の)能力=育つ資質・能力

39.次期指導要領の趣旨と AL の指導法ー79

- ① 教え方・学ばせ方が変わる ②方法の変化だけではなく結果の変化が求められている ③学びのアクティブ度を左右する三つの要素 ④これまでの授業以上に「深く考える行為」を大事にする

40.アクティブ・ラーニングを支える学びの三層ー82

- ①AL と協働学習の三層 ②三層の協働学習を組み合わせることで学びに「深み」が生まれる ③「深い学び」を満たす要素と特徴 ④学習は積み重ねも大事だが、積み重ね「方」が大事

41.議過程で変化するアクティブ・ラーニングの要素・定義ー85

- ①対話は内容の質と量双方の充実度が AL 度の要②活動の「型」よりも活動の質が「深い学び」の要を握っている③本当のアクティブは「思考」と「身体」双方の活動を求める④身体は脳に判断の情報を送っている

42.授業のアクティブ・ラーニング度を見つめる「三つの視点」ー88

- ①授業を AL にするには、どうしたらいいのか? ②「AL 型の授業を行うこと」が次期指導要領の目玉ではない ③AL は人的要素に左右される性質を持つ ④授業改善を図る「AL の基本的視点」